

山のトイレ問題雑感

岩村 和彦（山のトイレを考える会）

「山のトイレを考える会」が設立されて今年で7年を迎えようとしています。振り返れば2000年に横須賀代表の山の環境問題に関する講演会を聴きにいったのが縁でした。講演会終了後数名の有志が残り、更に議論を深めたことでその場で会設立の話が出ました。

会のメンバーは山を生業としている山岳ガイドから、家庭の主婦、山登りの愛好家、山岳環境の研究者など職業、性別、年齢など様々です。唯一共通しているのは、北海道の山を綺麗にしたい、美しい大自然を後世に残したい、との単純且つ熱い思いだったのです。

このまま行動を起こさなければ、山のトイレ問題はますます悪くなるばかりです。そのために自分達でできることをやっていこうと、行動に移すことを決めました。以後の活動状況については会のホームページに詳しく掲載してありますので、是非ご覧下さい。

「北海道 山のトイレ」で検索すれば直ぐ見つかります。

私が山歩きを始めたのは社会人になってからですから、既に30年近くなろうとしています。恵庭岳や夕張岳などの夏山を中心に登っておりましたが、正直に言うと始めの内は山のトイレ問題にはさほど関心を払ってはいませんでした。当時のはっきりした記憶はないのですが、使用したトイレトペーパーをちゃんと持ち帰っていたかどうかは、はなはだ自信がありません。ましてや他人の使ったペーパーを持ち帰えろうとは思いませんでしたし、ブツまで回収することになろうとは夢の中でのことでした。

トイレトペーパーは雨でも降れば溶けて無くなるんだから、というそんな程度の意識であったのです。

ただゴミ問題に対する関心は高く、ゴミがあると必ず拾うようにしていました。よく考えるまでもなく、使用したトイレトペーパーも正にゴミそのものです。また手に負えないのはし尿による水質汚染や土壌汚染の問題です。

自然の力とは本来偉大なものです。一日一人二人が川の上流でおしっこをしようが、藪の中でうんこをしようが、地域や時間が集中しなければそれは自然のサイクルの中で分解されていくものです。

それほど気になっていなかったこれらの問題に火を点けたきっかけが、日本百名山や中高年の登山ブームであったのは衆目の一致するところでしょうか。主因はと登山者の行動そのものですが、余りにも夏の一時期に多くの登山者が特定な山を中心に集中し過ぎたのも一因です。

夏山登山をやれば分かりますが、多くの方が休憩を取るところはほぼ同じ場所になります。水がある、景色が良い、広場がある、などです。

一例をあげれば、日本百名山の一つである羅臼岳の、岩尾別別温泉からの夏道の途中にある弥三吉水や銀冷水の水場周辺です。ここではほぼ全ての登山者が足を止めます。水を

飲むのは当然としても、序に休憩をし、トイレも済ませます。当然周囲の藪の中にはし尿は勿論のこと、使用済のトイレトペーパーの花畑と化しています。一見すると何も見えませんから、気付くのはトイレをするために藪に入った登山者だけです。

一昨年秋の「全道一斉山のトイレデー」で私は仲間二人と共に羅臼平の清掃をし、下山を利用してこの水場二箇所も集中的にペーパーを拾いましたが、それは酷いものでした。

深刻なのは水場や休憩地点ばかりではありません。山小屋のトイレも悲鳴を上げています。

これも日本百名山の一つである幌尻岳へのルート上にある幌尻山荘の異常な混み様は、噂に聞いている本州の山小屋を想像させるものです。営業小屋ではない山荘の設備はツアー客が押し寄せるようなものではありません。一杯になったトイレのし尿を日高山脈ファンクラブが手弁当で秋に担ぎ下ろしています。

一時期にせよ管理人がいるところはそれでもまだ、ある意味ましかもしれません。

無人の山小屋は登山者一人ひとりの正に使用態度にかかっています。清掃をする人はいませんし、定期的な汲み取り也没有ありません。綺麗に使うのは当然としても、使用したペーパーを最低限持ち帰ることより便屋の許容量を最大限生かします。生理用品やペットボトルなどゴミが混じっていることは論外ですが、これも現実です。

汲み取ったし尿を処理する際にこれが大変な困難を伴います。分別する必要があるからです。ごく一部の不屈き登山者とはいえ、それが積み重なれば大きな障害となります。

さて、話が前後しますが私自身は 15 年程前からは夏道登山はほとんどやっておられません。5 月から 10 月までは沢登りばかりなので、一般登山者が歩くルートを使うことは、沢を詰めて山頂からの下りの時位です。

かつては山岳会に入っていた人達だけが楽しむ特殊な登山形態だった沢登りも、徐々にその裾野が広がりだしています。一度それを味わうと虜になるほど魅力あるものですが、インターネットで情報が容易に手に入るのも一因になっているのは確かでしょう。

現に私が入っているインターネットの集まりでも、山に関する様々な情報が飛び交い、夏山登山しかやらなかった未組織登山者が沢登りやロッククライミング、冬山をやりだしているのを見ると、そのきっかけさえあれば、更にその人口は増えそうです。

こうして単に夏道を歩く登山から、沢登りなど異なった登山形態への広がりや、山のトイレ問題解決のためには極めて良い方向だと捉えています。一極集中が分散化されることによるメリットは計り知れません。

また、山岳会に所属していない私が僭越ながら言わせてもらえば、会の役割は山岳技術の伝承や講習の前に、山岳環境保護に対する意識付けを真っ先にやってほしいと思います。綺麗な山があってこそその私達登山者なのですから。

最後に日本百名山について。深田久弥氏にとって昨今の日本百名山ブームは本意ではないでしょう。彼にとっての価値ある百名山であり、草木もなびく山への一極集中は望んではいないはずです。一人ひとりが自分の百名山を目指してほしいと切に思うものです。